

### 第Ⅲ章 有識者への意見聴取

## 第Ⅲ章 有識者への意見聴取

### 1. 有識者への意見聴取の報告

#### (1) 有識者への意見聴取の報告

普天間飛行場跡地利用計画の考え方等について、各分野の専門的な知見を有する 19 名の有識者に対し意見聴取を行った。次項に意見聴取の内容を一覧表にまとめ、また意見の内容を、歴史・文化資源、自然環境、土地利用等の分野ごとに整理をした。

■有識者意見聴取のまとめ

有識者	専門	所属	経歴等	対応者	日付	場所	主な意見等
1 岸井 隆幸	・都市計画 ・交通計画	日本大学教授	都市開発事業及び都市交通計画に関する研究、日本都市計画学会会長、土木学会理事等を歴任、普天間飛行場跡地利用計画策定審議委員会委員	(県)下地、高嶺、内間 (宣)仲村、渡嘉敷 (普JV)UR	平成26年11月20日 14:30～15:30	新宿	・有識者の意見聴取について、専門分野の重なる先生は異なる視点で意見を聞くと良い(公園は、石川先生は全体緑地景観、浦井先生は国営公園の位置付け等)。 ・VRは、いろいろな人の意見を聞いて夢のあるものを、絵は沖縄の若い人を使ったらどうか。
			現 理工学部土木工学科教授	(県)高嶺、内間 (宣)仲村、渡嘉敷 (普JV)UR、オリコン (緑地JV)公園協会 (中南部JV)昭和、中央 C	平成27年3月6日 18:00～19:30	新宿	《普天間跡地》 ・有識者の意見は参考であり、委員会でオーソライズされるまでは断定的な表現は避けるべき。 ・広域道路、鉄道駅についてもオーソライズできていないならば強い表現はできない。 ・VRについては、一つの案に固定されないような紹介の仕方が必要。そのための説明の仕方には注意したほうが良い。  《西普天間住宅地区》 ・現道の宜野湾北中城線の1車線をバスレーンとして専用すると渋滞が発生することは容易に考えられる。今年度の検討においては、西普天間住宅地区の整備が進むと起こるべき問題を提示し、道路整備の必要性を強く指摘することである。
2 池田 孝之	・都市計画 ・地域づくり	NPO沖縄の風景を愛さずる会理事長	沖縄における都市計画・地域づくりに関する研究、内閣府沖縄振興審議会総合部会専門委員、沖縄県都市計画審議会委員等、普天間飛行場跡地利用計画策定審議委員会委員	(県)下地、高嶺、内間 (宣)仲村、渡嘉敷 (普JV)UR、国建	平成26年11月21日 10:00～11:00	那覇	・公園の有識者で、リサーチパーク等研究施設に造詣のある者を加えたらどうか。 ・VRの絵をかく人は、沖縄らしさが描ける人がよい。 ・他に西普天間住宅地区の進捗状況を説明。
		琉球大学名誉教授		(県)下地 (宣)仲村、渡嘉敷 (普JV)オリコン (緑地JV)公園協会、 国建 (中南部JV)昭和、プレック	平成27年3月10日 10:00～12:00	那覇	《普天間跡地》 ・歴史・文化と緑のネットワーク形成の考え方と「土地利用」の整合性を図ること。 ・普天間公園は、現在の国営沖縄記念公園の一地区としての位置づけが考えられるのではないかと。 ・先端技術(健康・医療)を扱うリサーチパーク等を立地させるといった生産性のある機能導入を検討すべき。 ・普天間における「新しいまちづくりを行うこと」を主眼とし、文化財等の「何を継承するのか」を明確にし、保全・活用方針を検討すべき。 ・VRについて、「シンボルタワー」は新しいデザインが望ましい。また、風土が感じられるイメージを表現すべき。  《西普天間住宅地区》 ・交通面では、国道58号との接続が一番の課題である。また、宜野湾北中城線におけるバスレーン設置のためには地区側での道路空間の確保が本来であれば望ましい。 ・スマートシティは、地域全体の都市基盤(インフラ)として構造をつくりあげることが重要。 ・地域素材の活用や地形(高低差)を活かした整備、生態系への配慮、歴史・文化財との調和への配慮が必要。  《西海岸地域》 ・海やマリナー、コンベンション施設がある「西海岸地域」と、コンベンション機能を補完する宿泊施設や商業施設の導入が想定される「普天間飛行場跡地」、国際医療拠点となる「西普天間住宅地区」の3つの連携が重要である。 ・交通利便性を活かすことが一番重要であり、那覇空港と北部のリゾート地、東海岸地域とをつなぐ拠点となる。 ・海岸に面していても歩けないことが欠点であり、海を見て楽しめるプロムナードの整備が必要である。 ・浦添エリアにおいては、那覇軍港との機能的な連携を考えるべきである。
3 中本 清	・景観	沖縄県建築設計サポートセンター理事長	前沖縄建築士会会長	(県)下地、高嶺、内間 (普JV)UR、国建、パナ	平成26年11月26日 10:00～11:30	設計サポートセンター	・VRを通じて何を見せるかが大事。建物だけではなく、コミュニティや街の賑わい、季節感等が感じられると良い。絵は、今後の活躍が期待される若手(ガラパゴ)を紹介。  12/4よりVR制作チーム打合せにて適宜アドバイス
4 安里 進	・考古学 ・琉球史	県立博物館・美術館館長	浦添城跡復元整備に従事、元浦添市教育委員会文化部長	(県)下地、高嶺、原 (緑地JV)公園協会 (普JV)UR、オリコン、国建	平成27年1月7日 14:00～16:00	県立博物館	・普天間の集落跡地は、琉球王朝に対する庶民の歴史として首里城などと同等の価値がある。 ・歴史文化や生活は里山的な自然と一体のものであり、活用を前提として保全を考えるべき。 ・今あるものの保存や活用では大きな集客は期待できないため、調査研究機能の充実が必要。 ・基地であったという歴史も、世界に向けて発信していくべきである。
5 室崎 益輝	・防災計画 ・防災教育	ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長	阪神淡路大震災の復興や防災研究に携わる、関西学院大学教授を退職	(県)下地、大城、原 (緑地JV)公園協会 (普JV)オリコン	平成27年1月13日 10:00～12:00	ひょうごボランティアプラザ	・日常は運動施設や公園などとして利用され、それが災害時には防災機能を発揮するという「スーパーマン理論」に基づいて考えるべき。 ・沖縄は島嶼県としての特質があり、輸送手段や物資の備蓄量、ボランティア等の受け入れについても十分な検討が必要で、コンクリート密集地帯への対応も考えるべき。 ・全国に向けたサポートやアジアを見据えた防災に関する調査研究なども検討対象となる。
6 橋 俊光	・防災公園	国営明石海峡公園管理センター長	国営公園誘致の経験及び防災公園計画や防災公園の管理実務等に関する専門家 元 兵庫県職員	(県)下地、大城、原 (緑地JV)公園協会 (普JV)オリコン	平成27年1月13日 14:00～16:00	三木総合防災公園	・防災公園を管理していくうえで最も重要なのは、公園部局と防災部局の日常的な連携・調整である。 ・防災設備や機材は日常的にも利用されることが大事で、そうでないといざという時に使えない。 ・兵庫県でも防災公園の周囲に県の防災センターや国の施設を誘致し、相乗効果がある。

有識者	専門	所属	経歴等	対応者	日付	場所	主な意見等
7 原 久夫	・地質学	琉球大学准教授	現 工学部環境建設工学科教授	(県)高嶺、内間 (官)渡嘉敷 (普JV)UR、オリコン、国建	平成27年1月22日 14:30~16:30	琉球大学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地下水の流れを阻害しない計画にすることが最も重要。掘削道路やトンネルは避けるのが良く、地下水脈を避けた配置でも地下水への影響がないとは言えない。</li> <li>・立ち入り調査では地表面から地下水位置、空洞位置の調査は困難である。洞穴の位置が重要なので、標高、緯度経度を整理するとよい。</li> <li>・水の流れを見るには雨の降った後に入るとわかりやすい。特に、水の出入り口、ドリーネ周辺、樹木周辺など。</li> <li>・空洞上には重量の重い建物は避けるべき。石灰岩層の厚い箇所への災害時に利用する公園等は地盤上問題はない。</li> <li>・現時点では地形分類図が地形改変前の地形地質状況がよくまとまっているので活用できる。</li> </ul>
8 宮城 邦治	・動物生態学 ・島嶼環境学	沖縄国際大学教授	沖縄県環境影響評価審査会会長、沖縄県文化財保護審査会専門委員、宜野湾市文化財保護審議会委員	(県)内間 (普JV)オリコン (中南部JV)フレック (緑地JV)公園協会	平成27年1月29日 14:00~16:00	沖縄国際大学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・更地にするような開発ではなく、地形や地質条件を利用しながら営まれてきた人々の生活を残し、見える形で継承することは、後世に残る財産となる。</li> <li>・基地の緑地は極相林でなく遷移途上の段階と考えられるので、立ち入り調査で考察するとよい。</li> <li>・現時点では草地は重要視する必要はない。樹林地では耕作地だった場所に二次的に成立したと考えられる北側の樹林に対し、南側の樹林地がより質が高い。</li> <li>・緑地の評価は、希少性の評価だけでなく、ガジュマルやハマユビワのように地域の典型的な植生が在来生物の生息地を創出するものであることも留意する。</li> <li>・緑地の保全は大山湿地の水源涵養の視点でも重要。</li> </ul>
			現 総合文化学部社会文化学科教授	(県)内間 (官)渡嘉敷 (普JV)UR、国建、パナ	平成27年3月11日 14:00~15:45	沖縄国際大学	<ul style="list-style-type: none"> <li>＜普天間VRに対する自然環境のアドバイス＞</li> <li>・樹木にとって大切なことは、地形、地質にあった緑を創生することで、普天間は北西の季節風と台風を考慮してこれに耐えられる都市緑化木を植えること。</li> <li>・基地の中に残されている森の植生をどう評価しどう残すかと、都市的な緑(安全性や快適性、癒し空間)をどのように作っていくか。公園はコンセプトによってどのような緑にするかが決まってくる。</li> <li>・生態学的には在来種を用いることが大事だが、都市の演出のために外来の樹木を選ぶことも必要になってくる。演出のために用いる樹がきちんと育つような環境と管理が大切になってくる。</li> </ul>
9 涌井 史郎	・地域振興 ・造園学	東京都市大学教授	国際的な観点からの地域づくり、公園づくり、地域振興の専門家、造園家、ランドスケープアーキテクト 現 環境情報学部環境情報学科教授	(県)下地、花城、大城 (普JV)UR (中南部JV)昭和 (緑地JV)公園協会	平成27年2月2日 10:00~12:00	六本木ヒルズ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・将来GDPが世界の18位まで後退すると予測される日本の経済危機意識のもとで、アジアの中心に位置する沖縄の開発は、成長過程の東南アジアの富裕層をターゲットにした開発を考えていくべき。</li> <li>・沖縄本島についても、山原の北部振興と中南部開発のバランスをどうとるのか考えていくべき。</li> <li>・独自の歴史文化や精神性が沖縄の良さであり、これを世界に向けて情報発信していけばよい。</li> <li>・これからの医療は、ストレスマネジメントやヘルスケアプロモーションといった「心のケア」が重要となってくるので、かつて長寿県であった沖縄に合うのではないかと。また、東南アジアから感染症がもたらされる可能性があるため、感染症の研究に特化することも一つの案である。</li> </ul>
10 松本 守	・公園計画 ・公園事業	元桐蔭横浜大学客員教授	公園行政、国営公園事業に関する専門家 元 国交省都市局公園緑地課長	(県)下地、大城、内間 (普JV)UR (緑地JV)公園協会	平成27年2月12日 10:00-12:00	ダイバーシティ東京オフィスタワー20階	<ul style="list-style-type: none"> <li>・復帰50周年の記念事業として位置付けられるなら、国営公園化は可能であり、その際に国際博覧会の誘致が出来るとなおよい。</li> <li>・国営公園化に向けては、まずは口号の記念事業型で攻めるべき。</li> <li>・まずは大規模公園の全体を国営で考え、県営公園との分担はその後の駆け引きの中で検討したらい。</li> <li>・アトリウムや温室のある動植物園はひとつのねらいであり、その際はマスで勝負すれば沖縄の素材でも勝てる。</li> </ul>
11 石川 幹子	・緑地計画	中央大学教授 東京大学名誉教授	環境デザイン、都市環境計画等を専門とし、水と緑を活かしたまちづくりの研究を实践 現 理工学部人間総合理工学科教授	(県)下地、大城、内間 (市)仲村、渡嘉敷 (普JV)UR、オリコン (緑地JV)公園協会 (中南部JV)フレック	平成27年2月12日 13:30-15:00	中央大学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・計画づくりは単純に考えるべきで①領域の検討、②構造の検討、③ダイナミズムの検討の手順で進めればよい。</li> <li>・緑地ネットワークの形成で重要なのは水と緑で、水では周辺河川も含め、緑では斜面緑地に貴重な空間が残されているので重視すべき。</li> <li>・普天間飛行場跡地以外の周辺の地域資源との連携が大切であり、十分な調査を行うべき。</li> <li>・パーセル(区画)単位で考えると、それぞれのパーセルで土地利用との関係性や緑地の形態・管理方法も異なるはず。</li> <li>・「沖縄の暮らしと持続的土地利用」など、普遍性を持ったここだけの広域緑地として世界に発信できるコンセプトが必要。</li> <li>・沖縄らしさを演出するのではなく、「本物の沖縄」をつくるべき。</li> </ul>
12 上原 良幸	・沖縄振興 ・観光振興	沖縄観光コンベンションビューロー会長	普天間飛行場跡地における大規模公園整備の提唱に関わる 元 沖縄県副知事	(県)下地、大城、原 (普JV)オリコン (緑地JV) (中南部JV)昭和	平成27年2月16日 13:00~15:00	沖縄観光コンベンションビューロー	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普天間の最大の魅力は「最高の場所」ということにある。全体を考え、都市機能の充実を優先させたい。</li> <li>・そのためにも行政がもっと土地を取得し、公共空間の充実を図ってほしい。</li> <li>・海外から見て、沖縄の魅力は「自然」と「歴史・文化」である。</li> <li>・海外からの観光客は予測を超えるペースで増加しており、今後もこの傾向は続くだろう。それにより、住民との問題が発生するかもしれないが、今後は観光客のことを抜きにしたまちづくりは考えられないのではないかと。</li> <li>・普天間を交通結節点とし、鉄軌道にこだわらず、海沿いのLRTや普天間でのパークアンドライドなど、交通のネットワークを考えていく必要がある。</li> <li>・普天間公園を様々な人が交流する「出会いの場」とし、「最高の公園」、「世界に冠たる公園」としてほしい。</li> </ul>

有識者	専門	所属	経歴等	対応者(予定)	日付	場所	主な意見等
13 稲田 純一	・ランドスケープ	(株)ウィン代表取締役	シンガポールにて国家開発省国立公園帳計画開発部長としてガーデンシティの国づくりに関わる	(県)下地、高嶺、原 (市)仲村、渡嘉敷 (普JV)UR、オリコン (緑地JV)公園協会 (中南部JV)昭和	平成27年2月18日 15:00～17:00	(株)ウィン	<ul style="list-style-type: none"> <li>全体を見据えて保全し残すことと新しく作るまちの水と緑をどう育てどう維持管理するか、最初のコンセプトが重要。沖縄には素晴らしい海があり、普天間では東側の台地から西海岸にかけて水と緑がつながることで豊饒な海を育てることにもつながるはず。ぜひ水と緑を繋げていってほしい。</li> <li>国際的な都市間競争力を持つためにも、緑は都市環境に必要なインフラで、街をきれいに緑化し維持管理する経済力がないところには投資は集まらない。</li> <li>世界的なリゾートは景観が統一され心地よさがある。そのためにも景観的連続性、バランスを考えることが重要になる。</li> <li>シンガポールも時間をかけて緑を創出してきたので、時間はかかるだろうが沖縄らしさを魅せられれば中国文化圏から人が集まってくるだろう。</li> <li>沖縄の環境(台風と塩害)を乗り越える緑を創出する特化戦略があるとよい、例えば世界一の芝生を目指すとか。それにより管理予算のかけ方も異なる。</li> <li>また、沖縄の医療は可能性がある。国内でも名だたる名医がいて自分も北部病院で冠動脈ステント治療でお世話になった。</li> </ul>
14 坂井 秀弥	・考古学	奈良大学教授	元文化庁記念物課埋蔵文化財担当、 普天間文化財調査に関わる  現 文学部文化財学科教授	(県)下地、高嶺、原 (市)仲村、渡嘉敷 (普JV)UR、オリコン、国建 (緑地JV)公園協会	平成27年2月19日 14:00～16:00	奈良大学	<ul style="list-style-type: none"> <li>基地内の神山集落は、戦前の状態がそのまま残されており、日本中でも稀な事例。当時の日常生活に必要な泉や田畑、ウタギ、墓があり、一般庶民の暮らしがそのまま残っているので、残された理由を含めて使わない手はない。その際に、いまの人たちがつながりを感じる事が大切で、残す意義がわからないと残す意味がない。</li> <li>埋蔵文化財は埋め戻すことが原則だが、今の状態で廃墟のまま残すことや一部復元して残す等残し方はいくつかあるが、そこに住民が参加する仕組み・体制が必要。地元の人と時間をかけて作っていくことが大切で、行政側だけでは失敗する。</li> <li>歴史を残すことは当時の社会がわかるようにすることで、並松街道も同じ位置に同じように復元すれば当時の人々と繋がる感覚が持てる。</li> <li>沖縄の埋文調査には専門家が足りない。民間はまだまだで行政がリードしないとイケない。そのための組織体制を組むことが早い時期から必要である。国の研究機関もあってしかるべきで、発掘調査と連携することでより文化財が生きてくる。まずは九州国立博物館あたりと協力していくことから始めたらよい。</li> </ul>
15 東 良和	・観光振興 ・経済	沖縄ツーリスト(株) 代表取締役社長	H25年度・中南部都市圏駐留軍用地跡地 周辺整備検討調査(西海岸地域)での 検討委員	(県)高嶺、内間 (中南部JV)昭和	平成27年3月3日 13:00～15:00	沖縄ツーリスト(株)	<ul style="list-style-type: none"> <li>外国人観光客は、“日本”を求めている。清潔、安心・安全、日本食、日本製品を求めている。</li> <li>沖縄のリゾート地は、空港から近く、また、リゾート地内の横移動が少ないことが特徴であり、家族層にとって便利なリゾート(ファミリーコンビニエンスリゾート)と言える。</li> <li>“量”と“質”は相反するものではなく、“量”があつてこそ“質”が保たれる。西海岸地域は、大きなキャパシティを持っているため、“量”を引き寄せるために開発すべき。</li> <li>旅行業法の緩和による容易な旅行業免許の取得、旅館業法の緩和による宿泊機能の集積が必要と考える。</li> <li>海外から見たときに、どこまでの範囲を一つの地域として設定して打ち出していか、エリア分けが重要な点である。北谷町までを那覇として捉えるかが大きな問題である。</li> <li>富裕層の呼び込みには、その方々の生活レベルを維持できる環境が必要であり、特に“言葉”の不自由さを感じさせないことが重要である。</li> <li>西海岸地域の海沿いを歩いて楽しめるウォーキング旅行(参考: 濟州オルレ)の展開が考えられる。その際、歩行専用の道があると良く、工場や倉庫地帯は緑やアートで隠すなどの工夫を施す。</li> <li>重粒子線治療は日本でのみの治療法であり必要性は高い。また、日本はリハビリの先進国でもある。沖縄においては、平和の礎の心で敵も味方も(戦争の敵国であっても)受け入れる療養施設として打ち出してもよいのではないか。</li> </ul>
16 大谷 健太郎	・観光政策	名桜大学上級准教授	観光事業論や観光政策論などを専門。 観光が地域に与える影響を政策的に科学的に分析、政策評価に関する研究に従事	(県)下地、高嶺、内間 (中南部JV)昭和	平成27年3月4日 19:00～21:00	沖縄県庁	<ul style="list-style-type: none"> <li>外国人観光客は、沖縄のありのままの自然に魅力を感じている。ありのままの自然を提供する北部地域との役割分担を考え、西海岸地域は徹底した開発による都市型リゾート地の模倣となることを目指してもよい。</li> <li>空港の着陸料の優遇が世界と比較すると低いので、その点での誘引方策は考えられるのではないかと。</li> <li>西海岸地域内において、富裕層をターゲットにした質の高いリゾートエリアや地域に利用されるリゾートエリアなど性格の異なるリゾート地があり、それぞれが連携するあり方がよいのではないかと。</li> <li>うるまIT津梁パークのようにビーチに近いリゾートオフィスの考えがあってもよい。</li> </ul>
17 蓑茂 寿太郎	・公園管理 ・まちづくり	熊本県立大学客員教授	大規模公園の計画作成に関する専門家  現 一般財団法人公園財団理事長	(県)下地、高嶺、大城、内間 (市)渡嘉敷 (普JV)UR、オリコン (緑地JV)公園協会、国建	平成27年3月9日 17:00～19:00	沖縄県庁	<ul style="list-style-type: none"> <li>最も重要なのは地域住民や県民、国民の共感を得られるコンセプトの構築であり、これには未来展望的な言葉が必要で、絵を拙速に描くのではなく、ストーリーを大事にすべき。</li> <li>現状認識のためには時間軸と地域軸という概念で整理すべきで、前者では年表の整理が、後者では地図の整理が必要であるが、その際に地域、県、国、アジアといった視点が必要である。</li> <li>公園の全てに手を加えるのではなく、一部を整備するリージョナルパークという手法の導入も参考になる。</li> <li>持続可能なまちづくりのためには、行政が担う公共から市民が担う公共への転換が求められ、このひとつにトラストなどもある。</li> <li>周辺市街地の密集の解消に寄与するなど、引き算の理論でのまちづくりへの取り組みも普天間跡地の役割である。</li> <li>生物多様性などを大事にした環境計画の作成は世界の賛同を得ることも出来、この指標として大山湿地の保全は重要である。</li> <li>国際コンペの実施や国際シンポジウムの開催などを通じて幅広い知見を集める手法もある。</li> </ul>

	有識者	専門	所属	経歴等	対応者	日付	場所	主な意見等
18	池田 栄史	・考古学	琉球大学教授	宜野湾市文化財保護審議会委員  現 琉球大学法学部教授	(県)下地、原、内間 (市)渡嘉 (普JV)UR、オリコン、 国建	平成27年3月26日  14:30～16:00		<ul style="list-style-type: none"> <li>・人々のコミュニティを形成する場所を残す、人々の集まる空間、日常的に地域の文化財情報が分かる、体感できるまちづくりに繋げてもらいたい。</li> <li>・文化財の保全活用は、ぎのわんのシマの成り立ちを現在のまちづくりに活かし、住民のアイデンティティに繋げることもである。</li> <li>・戦前の民俗地図、土地利用、地形等を取り込んだGIS情報の活用が有効である。</li> <li>・基地内の多様な埋蔵文化財の保全活用を検討する前提として、まず個別の情報の共有化を図り、膨大な数の中から発掘調査の優先順位を絞り込む、さらに行政の調査体制を整えることが考えられる。</li> <li>・基地内の文化財を跡地利用に活かすには、現在のぎのわんの原型を形成している近世・近代のムラづくりに欠かさない、並松街道、湧水群、古集落(屋取集落も含む)等が“宜野湾らしさ”を表しており、戦争で多くの遺跡が凍結され基地内に残っていることの背景を上手くまちづくりに活かすことが重要である。</li> <li>・基地内の郷友会、地主会等は団結心が強くまちづくりに参画する意向も高いので協力体制を築き上げていくことも必要な視点である。</li> <li>・跡地利用に向けて、大幅に土地が改変された元の土地を削られてしまった場所は、遺跡等の残存が期待できない、復元できないことなどから道路を通すなどの利用も考えられる。計画道路は新城古集落を上手く迂回するルートを設定するなど、直線的な線形ではなく地形に合わせて蛇行するような計画がふさわしいのでは。</li> <li>・文化財をどう活かすかは、例えば西普天間住宅跡地の場合、安仁屋集落の保全活用で住民の思い出の場所、そこが残れば自分たちも居ることに繋がり、シマの人の精神的な拠り所となる。</li> </ul>
19	下地 芳郎	・観光政策	琉球大学教授	前沖縄県庁観光政策統括監  現 琉球大学観光産業科学部教授	(県)下地、高嶺、内間 (中南部JV)昭和	平成27年3月30日  13:00～15:00	琉球大学	<ul style="list-style-type: none"> <li>・那覇空港から北谷町までのエリアで考えるべきであり、その中で歩いて楽しめるウォーターフロントをどうつくるかが西海岸地域の価値を高める大きなポイントとなる。</li> <li>・公共交通機関(バス、地下鉄、モノレール、LRT)の整備は世界的な観光地として重要な要素であり、西海岸地域の一定区間でもよいので公共交通機関の整備が必要である。</li> <li>・西海岸地域は、自然と都市とが融合したエリアであり、沖縄本島内での連携だけでなく、慶良間諸島との連携も考えることで、「都市」と「自然」と「島」の3つが重なるコンセプトが成り立つ。</li> <li>・住民が一番住みやすい環境づくりを最優先し、そこで住民と観光客とが交流するといった「住環境」との連携のほか、次世代の人材育成や日本語の研究拠点などの「教育」、観光客に対する危機管理などの「医療」面での連携が重要である。</li> <li>・都市型とはビジネスが成り立つことであり、仕事しながら遊ぶといったように、ビーチリゾートとビジネスリゾートの組み合わせが必要である。</li> </ul>

## 1) 歴史・文化資源

歴史・文化資源全体および個別の遺跡等に関する有識者意見を以下に整理した。

### ○歴史・文化に係る意見

- ・ 普天間は首里と対比した庶民文化の歴史として価値がある（安里）
- ・ 歴史・文化や生活は里山的な自然と一体のもの（坂井）
- ・ 基地内には様々な時代の遺跡がある（坂井）
- ・ 基地であった歴史も世界に向けて発信すべき（安里、坂井）
- ・ 文化財の発掘調査、保全・活用は専門的な研究機関との連携が重要で、そのための体制づくり、専門家育成が必要（坂井）
- ・ 地形や地質条件を利用してきた庶民生活を見える形で継承することは、構成への財産となる（宮城）

### ○保全・活用に係る意見

- ・ 文化財はただ保全するのではなく、地元住民も巻き込んで活用を考える必要がある（安里、坂井）
- ・ 「沖縄の暮らしと持続的土地利用」等、普遍性を持った広域緑地として世界に発信できるコンセプトが必要（石川）

### ○コンセプトに係る意見

- ・ 独自の歴史・文化や精神性が沖縄の良さであり、これを世界に向けて発信すべき（涌井）
- ・ これからの医療は、ストレスマネジメントやヘルスケアプロモーションといった「心のケア」が重要となる（涌井）



### 【歴史・文化に関するもの】

- ・ 普天間の集落跡地は、琉球王朝に対する庶民の歴史として首里城などと同等の価値がある。  
（安里）
- ・ 基地であったという歴史も、世界に向けて発信していくべきである。（安里）
- ・ 独自の歴史文化や精神性が沖縄の良さであり、これを世界に向けて情報発信していけばよい。  
（涌井）
- ・ 海外から見て、沖縄の魅力は「自然」と「歴史・文化」である。（上原）

### 【保全・活用に係るもの】

- ・ 歴史文化や生活は里山的な自然と一体のものであり、活用を前提として保全を考えるべき。  
（安里）
- ・ 歴史を残すことは当時の社会がわかるようにすることで、並松街道も同じ位置に同じように復元すれば当時の人々と繋がる感覚が持てる。（坂井）
- ・ 今あるものの保存や活用では大きな集客は期待できないため、調査研究機能の充実が必要。  
（安里）
- ・ 基地内の多様な埋蔵文化財の保全活用を検討する前提として、まず個別の情報の共有化を図り、膨大な数の中から発掘調査の優先順位を絞り込む、更に行政の調査体制を整えることが考えられる。（池田榮史）
- ・ 基地内の埋蔵文化財の全容を把握するには、発掘調査に係る人材の養成が急務である。地域で育て経験を積み上げることが必要である。県外や民間からの登用については沖縄の地域特性に順応するには時間と手間暇が掛かるので効果的であるとは言えないのではないか。（池田榮史）
- ・ 広域的な支援体制の構築から見れば、県内の大学（琉球大学等）が核となり県外の研究者等のネットワークを活用することで調査のノウハウを構築することは可能ではないか。将来的には国家プロジェクトに位置づけることも可能では。合わせて、既存の研究機関や沖縄県埋蔵文化センター等の強化も必要である。（池田榮史）
- ・ 文化財を活かす上で、例えばランドマークとして、腰当森（くさてむい）、井戸、闘牛場（ウシナー）等がムラの代表的な景観を構成している。人々のコミュニティを形成する場所を残す、人々の集まる空間、日常的に地域の文化財情報が分かる、体感できるまちづくりに繋げてもらいたい。  
（池田榮史）
- ・ 文化財の保全活用は、宜野湾のシマの成り立ちを現在のまちづくりに活かし、住民のアイデンティティに繋げることでもある。（池田榮史）
- ・ 基地内の郷友会、地主会等は団結心が強くまちづくりに参画する意向も高いので協力体制を築き上げていくことも必要な視点である。（池田榮史）
- ・ 宜野湾市文化課が取組んでいる、戦前の民俗地図、土地利用、地形等を取り込んだGIS情報の活用が有効である。（池田榮史）

### 【コンセプトに係るもの】

- ・ 基地内の神山集落は、戦前の状態がそのまま残されており、日本中でも稀な事例。当時の日常生

活に必要な泉や田畑、ウタキ、墓があり、一般庶民の暮らしがそのまま残っているので、残された理由を含めて使わない手はない。その際に、いまの人たちがつながりを感じる事が大切で、残す意義がわからないと残す意味がない。(坂井)

- ・埋蔵文化財は埋め戻すことが原則だが、今の状態で廃墟のまま残すことや一部復元して残す等残し方はいくつかあるが、そこに住民が参加する仕組み・体制が必要。地元の人と時間をかけて作っていくことが大切で、行政側だけでは失敗する。(坂井)
- ・歴史・文化と緑のネットワーク形成の考え方と「土地利用」の整合性を図ること。(池田孝之)
- ・普天間における「新しいまちづくりを行うこと」を主眼とし、文化財等の「何を継承するのか」を明確にし、保全・活用方策を検討すべき。(池田孝之)
- ・沖縄の埋文調査には専門家が足りない。民間はまだまだで行政がリードしないといけない。そのための組織体制を組むことが早い時期から必要である。国の研究機関もあってしかるべきで、発掘調査と連携することでより文化財が生きてくる。まずは九州国立博物館あたりと協力していくことから始めたらよい。(坂井)
- ・基地内の文化財を跡地利用に活かすには、現在の宜野湾の原型を形成している近世・近代のムラづくりに欠かせない、並松街道、湧水群、古集落（屋取集落も含む）等が“宜野湾らしさ”を表しており、戦争で多くの遺跡が凍結され基地内に残っていることの背景を上手くまちづくりに活かすことが重要である。(池田榮史)
- ・跡地利用に向けて、大幅に土地が改変された元の土地を削られてしまった場所は、遺跡等の残存が期待できない、復元できないことなどから道路を通すなどの利用も考えられる。計画道路は新城古集落を上手く迂回するルートを設定するなど、直線的な線形ではなく地形に合わせて蛇行するような計画がふさわしいのでは。(池田榮史)
- ・文化財を活かしたまちづくりの先進事例としては、宇治市、太宰府のような、まちのイメージが既に成り立っている所では、地主に説明し、地域の景観に合わせた建て替えなどが行われている。(池田榮史)
- ・文化財をどう活かすかは、例えば西普天間住宅跡地の場合、安仁屋集落の保全活用で住民の思い出の場所、そこが残れば自分たちも居ることに繋がり、シマの人の精神的な拠り所となる。(池田榮史)

## 2) 自然環境

自然環境全体および各箇所に係る主な有識者意見は以下のとおりである。詳細については次頁以降に整理した。

### 【全体に関わるもの】

- ・もともとの地形や地質条件を利用しながら営まれてきた人の生活を残し、目に見える形で継承することは後世に残る財産となる。(宮城)
- ・自然や歴史特性を別々の価値付けで捉えず、一体的に保全・活用する視点が重要(安里)
- ・集落防護林や屋敷林、地域全体を囲うグリーンベルトも集落景観を考える上で不可欠な要素である(安里)
- ・一度更地にするような開発ではなく、もともとの地形や地質条件を利用しながら営まれてきた人の生活を残し、目に見える形で継承することは後世に残る財産となる。(安里)
- ・「沖縄の暮らしと持続的土地利用」等、普遍性を持った広域緑地として世界に発信できるコンセプトが必要(石川)
- ・領域・構造をもとにした区画単位で土地利用と緑の関係性を整理し、緑地の形態・管理方法を検討すべき(石川)
- ・緑は世界的な都市間競争のために必要なインフラ(稲田)
- ・景観的連続性、バランスを考えて緑を創出し、担保するルールを定めて維持管理していくべき(稲田)
- ・周辺の地域資源も含めて水と緑は連携させるべき(石川・稲田) ※「広域エリア方針図」参照



## 【立ち入り調査（自然環境調査）に関して】

### ●基地内の想定される状況

- ・返還エリアの緑地は極相林ではなく、遷移途上のいずれかの段階と考える。極相林にどの程度近づいているかを考察するとよい。（宮城）
- ・返還エリアの樹林は、南側の樹林地が、より質が高いように思う。返還エリアの北側に広がる斜面林の立地環境に地形的に近く、同様の樹林が存在する可能性が考えられる。また、返還エリア内の北側の樹林は、過去に耕作地だった場所に二次的に成立した樹林であると考えられる。（宮城）
- ・返還エリア内の水場は、動植物の生息・生育環境としてはそれほど期待できないのではないかと。（宮城）

### ●立ち入り調査の方法など

- ・立ち入り調査が困難な場合は、空中写真の活用や、フェンス沿いから見れる範囲の確認をすることが妥当と考える。空中写真は、計年的に並べることで樹林の生長の状況を確認することができる。（宮城）
- ・返還エリアは石灰岩地帯であり、洞穴が多数存在することが推察される。ただし、初期段階の調査としては、滑走路や住宅以外の場所を対象に実施することになるだろう。（宮城）
- ・宜野湾市の所持する自然環境調査の結果で、机上調査を補うことができる可能性がある。例えば巨樹巨木の調査結果が存在するはずである。（宮城）
- ・コウモリ類の把握は技術的に難しいと考える。また、現在、当該地域に生息しているかどうかはわからない。（宮城）
- ・JV入手済のボーリングデータ、柱状図以外はない。（原）
- ・石灰岩台地が北東～南西の帯で連続するため、北東側、南西側の延長線上の地盤データがあれば参考となる。（原）
- ・沖縄総合事務局でボーリングデータを公開している。（原）
- ・雨の降った後に入ると水の流れがわかるので良い。季節の影響は特にない。（原）
- ・特に見る場所は、水の入り口・出口、ドリーネ周辺、樹木周辺で地質や水の流れがわかる。（原）
- ・概査ルートは南東～北西方向の地質の横断方向で、地形の変化を把握しやすく望ましい。（原）

### ●経年的な調査計画に関して

- ・樹林の特性を把握する上では、調査ベルトを設け、連続的に樹林の状況を把握してみてもどうか。地形や土壌の変化に応じて成立する樹林の質的な情報も確認できると考える。（宮城）
- ・樹林の評価は、植生学的な体系的な評価を行うことも必要である。そのため、詳細調査段階では、植物社会学的調査も実施することが望ましい。（宮城）
- ・地下水・空洞の位置の調査は困難である。（原）
- ・地下水のトレーサー調査による水みち探査は、1kmの長さがあると枝分かれもするので困難。（原）
- ・石灰岩は透水性が良いため、水の収支計算が重要。（原）
- ・洞穴は位置が重要なので、標高・緯度・経度を確認し、整理するとよい。（原）
- ・空洞位置が明らかな測線を探査して、結果を検証するとよい。（原）
- ・電気探査の有効性については、最新の電気探査に精通している専門家に確認するとよい。（原）

## 【自然環境の保全活用について】

### ●計画上のコントロールポイントに関する事項

- ・返還エリアにおける緑地の保全は、大山湿地の水源涵養という視点でも重要と考える。(宮城)
- ・机上検討のみに限られる現段階では、草地はそれほど重要視する必要はない。樹林を重視すべきである。(宮城)
- ・石灰岩地帯に特徴的な植物としてクワナガエノキ（リュウキュウエノキ）、ヤエヤマネコノチチがあり、これを食草とするフタオチョウは重視する対象として適切と考える。フタオチョウは天然記念物であり、当該地域では個体数も少ない。過去の調査では普天間川周辺などでも生息が確認されている。(宮城)
- ・アマミアラカシ等、どんぐりを形成するブナ属の樹種があれば注視するとよい。重力散布の植物であり、昔から残っている緑地であることが推察される。(宮城)
- ・水みちのある場所は、人が住みにくく、災害の発生可能性がある場所となっていることも多い。跡地がこの機会にそのような場所に住んでいる人の移転先ともなりえる。(稲田)

### ●保全活用の方策について

- ・重要種に偏重した保全は適切ではないと考える。その地域にふさわしい生態系全体を保全することや、誘導するような視点が重要である。(宮城)
- ・緑地の評価は、地形・地質との関係性や人の利用なども含めて評価してはどうか。返還エリアの植生はやんばるの原生林の種構成とはそもそも異なっている。例えば保全上重要な植生として抽出したものが人にとって身近にある植生では保全対象としての説得力に欠けることも想定される。(宮城)
- ・緑地の評価は、その場にふさわしい視点を決めることが適切である。例えば当該地域に存在することが推察されるガジュマルやハマイヌビワは、レッドリスト等による希少性の評価では低い評価となるが、地域的に見ると典型的な植生であり、在来生物の生息地を創出するものであり、人の利用の面からも重要な要素である可能性が考えられる。(宮城)
- ・歴史・文化資源、あるいは既存の重要な緑をいかに保全・活用するかということも重要であるが、同時に新しい街はその部分以外でつくられていくので、新しい街の緑・水を如何に創出し、育て、維持していくかを考えるべき。(稲田)

### ●広域のネットワークや周辺環境との関係について

- ・普天間飛行場跡地の中だけで考えても、新しいまちづくりは出来ない。基地外の地域の資源との連携が重要である。このためには、十分な調査を行う必要がある。(石川)
- ・広域緑地ネットワークで重要なのは水と緑である。水では湧き水や水脈の他に河川も押さえる必要がある。緑では、ここでは斜面緑地が生命線であり財産であるため、これを守り活かしていくことが求められる。(石川)
- ・跡地周辺のまちとの関係性は当然重要であり、今回の面的な開発を起爆剤としていかに周辺の町に波及させるかという観点が重要で、その際に緑のネットワークの考え方は大事になる。(稲田)
- ・水系は高台から海まで必ず繋がっているの、跡地だけでなく周辺を含めて考えないといけない。川を守り、後背地の森を育成すれば、沖縄の資本である海も守られ育成される。将来の投資とも

なる。(稲田)

- ・森川公園は 30 年ほど前にはトカゲモドキが生息していた。その後、採集圧により絶滅したと考えられるが、こういった重要種も残っているかもしれない。(宮城)

### 【環境づくり全般について】

#### ●コンセプトに関すること

- ・一度すべて更地にするような開発ではいけない。もともとの地形や地質条件を利用しながら営まれてきた人の生活を残し、目に見える形で継承することは後世に残る財産となる。(宮城)
- ・まず検討すべき「領域」を考えるが、これは当該地のポテンシャルによって異なる。次いで「構造」を検討するが、幹線道路の位置や形状などは重要である。最後に、空間を活かす場、生きる場を創るという意味での「ダイナミズム」を検討すればよい。(石川)
- ・コンセプト・考え方は大切にしなければならない。その上で、それぞれの場所において緑の計画、全体の敷地計画は一体どうであるべきかを見据えて、毎年の積み重ねをつなげていくことが重要。(稲田)
- ・資料や分析などの条件整理だけでなく、その先のまちづくりのアイデアや戦略立案が大事。(稲田)
- ・マネジメントにも関連することとして、芝生、地面の緑を徹底して世界レベルにするといったアイデアも考えられる。緑には、景観的な美しさの他にも、排水やヒートアイランド、快適性など様々な効果がある。(稲田)
- ・跡地利用においても社会・時代の流れ、政治の力は大きいと思うが、だからこそ技術者は、技術論として絶対に揺るがないものを筋として持っていくべき。(稲田)

#### ●まちの骨格や環境の形成について

- ・計画地を区画割りし、区画単位で考えると、土地利用や緑地配置等で無限の可能性はある。病院を核としたパーセルであれば、周囲にはヒーリングや沖縄の食に関する緑の配置が想定されるし、ホテルを核としたパーセルでは、ホテルによる高品質な緑の管理もある。こうした取り組みは、セントラルパークやボストンで実践されており、公共は基盤整備、民間はその区画内での事業展開という仕分け方も参考になる。(石川)
- ・沖縄はこれまでも限られた資源を活かしながらの生活が営まれてきた。こうした庶民の暮らしを復元しながら、新しい機能を追加していけばよい。そうすれば「沖縄の暮らしと持続的土地利用など」、普遍性を持った、かつここだけの広域緑地として世界に発信していける。これは公園だけでなく、まち全体で取り組まないといけない。そのベースとなるのが集落形態であり、この研究を進めるべきである。(石川)

### 【緑の中のまちづくりに関すること】

#### ●緑の形成手法について

- ・公園利用の視点では、導入する緑化資材の樹種は早めに決めた方がよい。樹木の生長には時間がかかるため、できるだけ早めに方針を決め、導入を図っていくと良いのではないか。(宮城)
- ・緑のネットワークにおいては公園・緑地だけでなく、むしろ道路の街路樹が緑の都市計画・まち

づくりにおいては非常に重要な役割を担っている。(稲田)

- ・シンガポールでは学校の校庭を全面芝生としているが、それには見た目に美しいということもあるが、土の流出防止、砂埃の防止、水はけ、蚊の発生の抑制、地面温度の低減など様々な効果があり、お金以上に必要なインフラと考えられる。(稲田)
- ・シンガポールではカウグラスという日本でいう雑草みたいな芝生を使っているが、匍匐(ほふく)性が強くその一種類でコントロールでき、さらに値段も安く維持管理もやりやすいものなので、全面的に都市の地面の緑に使うものとしては適している。(稲田)
- ・海岸線の緑も重要。空地となっている海岸線も見られる。シンガポールで行われていたインターリムユース(未利用地の公園としての暫定利用)も仕組みづくりが可能ならば良いと考える。(稲田)

### ●維持管理について

- ・維持管理のあり方を検討して行くのは一仕事であり、地元企業も含め、民間の活用も考えないといけない。公園も公益性を保ちながら収益を確保していく必要がある。(石川)
- ・緑をどうマネジメントするかルールづくりが必要。現行法や行政、市民感情に照らし合わせて、可能な範囲でルールを検討すべき。例えば住む側にとっても、密な草刈りによる蚊を媒介とした伝染病予防や良好な環境が保障されるといったメリットは多いにあると考える。(稲田)
- ・緑を創出・維持管理には、ある程度の予算とそのコンセンサスが必要だと思うが、そのためには、一つはブランド力が重要。緑の整備が整っている都市は、緑に投資する余裕のある都市としてブランド力が高まり投資家も集まる。(稲田)
- ・これからの沖縄の価値を上げるためには緑が重要で、独自の価値観・目標を持って一流を目指すことが必要。(稲田)
- ・跡地利用に際してもタウンマネジメント等のソフトの面を考えていくべき。例えば企業誘致の際に維持管理費負担を条件とするなど、街のおきてをつくらないと質の高い維持管理は難しいと考える。(稲田)
- ・これまでの公園等の整備は、「行政が担う公共」という役割分担のもとに進められてきたが、人口減社会の中で税収も見込めず、持続可能なまちづくりのためには、自ずと「市民が担う公共」へのシフトが求められる。(蓑茂)
- ・雨水や湧水に頼るコンパクトな水資源、強風に悩まされる地域、多くの地主がおりそれも増えているという現状を踏まえると、市民が担う公共につながるようなトラストの取り組みが想定される。アメリカでは国立公園という手法で国家が整備、管理したが、イギリスではナショナルトラストという手法の国民信託を行い、「一人の一万ポンドより、一万人の一ポンド」という考え方で取り組まれた。普天間跡地でもこうした取り組みは検討する余地がある。(蓑茂)

### 【土地利用等への配慮点について】

#### ●基地全体における配慮事項

- ・返還エリアだけではなく、地下水を含めた水の流れを考えながら計画を策定すべきである。大山

湿地の湧水は返還エリアも含めた範囲に降った水が起源となっているため、地表全てを固めてしまうと水が枯れるようなことも考えられる。(宮城)

- ・計画は地下水の流れを把握した上で策定することが望ましい。(宮城)
- ・石灰岩地帯は、地下に空洞が存在する可能性があるため、地表からの石灰岩地盤の厚さを把握した上で計画を策定する必要がある。空洞の存在により、地面が陥没することを懸念する。(宮城)
- ・地下水の流れを阻害しないことが最も重要。(原)
- ・断層沿いでは岩盤が破砕されているため留意が必要。(原)

#### ●地下水の影響に留意した道路・鉄道計画

- ・縦貫道・横断道共に平面道路が最も地下水への影響が少ないので良い。(原)
- ・掘割構造やトンネルは避けるのが良い。地下水脈を外した横断道の配置であっても地下水への影響がないとは言えないので十分な調査・検討が必要。(原)
- ・高架構造は橋脚配置を留意すれば影響は少ない。支持層は島尻泥岩層となる。西海岸道路は石灰岩層が60m程度あるが現在の技術で施工上問題ない。(原)

#### ●空洞・水盆上での土地利用

- ・災害時に利用する公園等での利用は地盤上特に問題ない。(原)
- ・重量の重い建物は避けるべき。(原)
- ・地形分類図は、地形改変前の地形地質状況が非常によくまとまっているので活用できる。Lw(琉球石灰岩丘)は新しく柔らかい地層と思われる。(原)
- ・ジオパークとして活用が考えられる。(原)

### 3) 土地利用ほか

土地利用および公園・緑地、防災に関する有識者意見を以下に整理した。

#### 【土地利用に関すること】

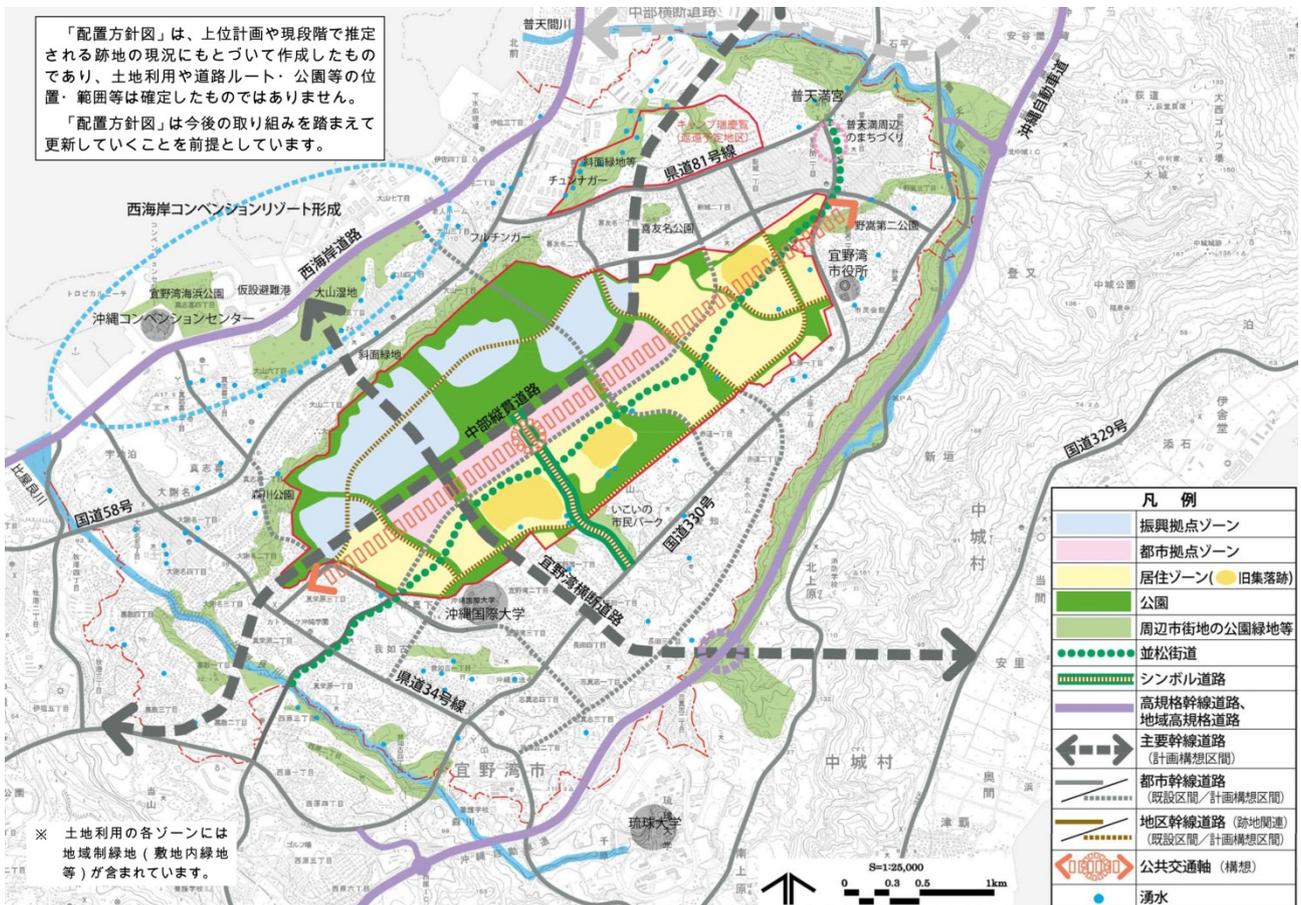
- ・地下水の流れを阻害しない計画にすることが最も重要（原）
- ・アジアの中心に位置する沖縄では、成長過程の東南アジアの富裕層をターゲットにした開発を考えるべき（涌井）
- ・沖縄本島についても、山原の北部振興と中南部開発のバランスをどうとるのが考えていくべき（涌井）
- ・普天間では東側の台地から西海岸にかけて水と緑がつながることで豊饒な海を育てることにつながる（稲田）

#### 【公園・緑地に関すること】

- ・大規模公園の全体を国営で考え、県営公園との分担はその後の調整で検討するとよい（松本）
- ・公園の2~3割だけ手を入れ、そのほかは園路程度の整備に留めるような、都市公園と国立公園の中間的な性格の公園（リージョナルパーク）の導入が望ましい（蓑茂）
- ・緑地の評価は、希少性の評価だけでなく、地域の典型的な植生が在来生物の生息地を創出することも留意（宮城）
- ・緑地の保全は大山湿地の水源涵養の視点でも重要（宮城）
- ・緑地ネットワークの形成として、水では周辺河川も含め、緑では斜面緑地の貴重な空間を重視すべき（石川）

#### 【防災に関すること】

- ・日常は運動施設や公園などとして利用され、災害時には防災機能を有する公園の検討が必要（室崎）
- ・防災設備や機材は日常的にも利用されることが大事（橘）



## 【土地利用に関すること】

### ●国際的な視点から見る沖縄の位置づけ

- ・沖縄だけを見た振興ではなく、世界の中での日本の立ち位置を踏まえた沖縄振興の在り方を考えないといけない。アジアの中心に位置する沖縄では、成長過程の東南アジアの富裕層をターゲットにした開発を考えるべき（涌井）
- ・西普天間で国際医療拠点として重粒子線施設があるが、工業研究分野での活用まで広げて二重効果を期待してよいのではないか。例えば感染症に特化するとかで、東南アジアと提携して研究拠点にする。（涌井）
- ・普天間は沖縄の聖域にあたり、独自の歴史文化や精神性を大事にすることが沖縄の良さであり、これを世界に向けて情報発信していけばよい。（涌井）
- ・これからの医療は、ストレスマネジメントやヘルスケアプロモーションといった「心のケア」が重要となってくるので、かつて長寿県であった沖縄に合うのではないか。また、東南アジアから感染症がもたらされる可能性があるため、感染症の研究に特化することも一つの案である。（涌井）
- ・地域認識では、沖縄の中央に位置する宜野湾、日本の南端に位置する沖縄、そして九州が東アジアのゲートウェイと位置付けられるのに対し、東南アジアのゲートウェイである沖縄という位置づけができる。（蓑茂）

### ●機能導入、計画、コンセプトについて

- ・先端技術（健康・医療）を扱うリサーチパーク等を立地させるといった生産性のある機能導入を検討すべき。（池田孝之）
- ・歴史・文化と緑のネットワーク形成の考え方と「土地利用」の整合性を図ること。（池田孝之）
- ・計画地を区画割りし、区画単位で考えると、土地利用や緑地配置等で無限の可能性がある。病院を核としたパーセルであれば、周囲にはヒーリングや沖縄の食に関する緑の配置が想定されるし、ホテルを核としたパーセルでは、ホテルによる高品質な緑の管理もある。こうした取り組みは、セントラルパークやポストンで実践されており、公共は基盤整備、民間はその区画内での事業展開という仕分け方も参考になる。（石川）
- ・沖縄はこれまでも限られた資源を活かしながらの生活が営まれてきた。こうした庶民の暮らしを復元しながら、新しい機能を追加していけばよい。そうすれば「沖縄の暮らしと持続的土地利用など」、普遍性を持った、かつここだけの広域緑地として世界に発信していける。これは公園だけでなく、まち全体で取り組まないといけない。そのベースとなるのが集落形態であり、この研究を進めるべきである。（石川）
- ・コンセプトは概念と訳されるが、「共感」あるいは「なるほどな」と言われるべきものであり、普天間跡地の整備には、この共感を呼ぶものが必要である。これには未来展望的な言葉が必要で、環境共生などはもう古い。（蓑茂）

### ●交通について

- ・現道の宜野湾北中城線の1車線をバスレーンとして専用すると渋滞が発生することは容易に考えられる。今年度の検討においては、西普天間住宅地区の整備が進むと起こるべき問題を提示し、

道路整備の必要性を強く指摘することである。(岸井)

- ・交通面では、国道58号との接続が一番の課題である。また、宜野湾北中城線におけるバスレーン設置のためには地区側での道路空間の確保が本来であれば望ましい。(池田孝之)
- ・海やマリナー、コンベンション施設がある「西海岸地域」と、コンベンション機能を補完する宿泊施設や商業施設の導入が想定される「普天間飛行場跡地」、国際医療拠点となる「西普天間住宅地区」の3つの連携が重要である。(池田孝之)
- ・西海岸地域は、交通利便性を活かすことが一番重要であり、那覇空港と北部のリゾート地、東海岸地域とをつなぐ拠点となる。また、海岸に面していながらも歩けないことが欠点であり、海を見て楽しめるプロムナードの整備が必要である。(池田孝之)
- ・普天間を交通結節点とし、鉄軌道にこだわらず、海沿いのLRTや普天間でのパークアンドライドなど、交通のネットワークを考えていく必要がある。(上原)

### ●自然環境への配慮について

- ・地下水の流れを阻害しない計画にすることが最も重要(原)
- ・広域緑地ネットワークで重要なのは水と緑である。水では湧き水や水脈の他に河川も押さえる必要がある。緑では、ここでは斜面緑地が生命線であり財産であるため、これを守り活かしていくことが求められる。(石川)
- ・普天間では東側の台地から西海岸にかけて水と緑がつながることで豊饒な海を育てることにもつながる(稲田)

### ●観光について

- ・外国人観光客は、沖縄のありのままの自然に魅力を感じている。ありのままの自然を提供する北部地域との役割分担を考え、西海岸地域は徹底した開発による都市型リゾート地の模倣となることを目指してもよい。(大谷)
- ・西海岸地域内において、富裕層をターゲットにした質の高いリゾートエリアや地域に利用されるリゾートエリアなど性格の異なるリゾート地があり、それぞれが連携するあり方がよいのではないかと。(大谷)
- ・沖縄のリゾート地は、空港から近く、また、リゾート地内の横移動が少ないことが特徴であり、家族層にとって便利なリゾート(ファミリーコンビニエンスリゾート)と言える。(東)
- ・旅行業法の緩和による容易な旅行業免許の取得、旅館業法の緩和による宿泊機能の集積が必要と考える。(東)
- ・観光振興という面では、沖縄らしさを出すことで、特にアジア圏、海洋文化圏など同胞のマーケットをいかに引き込むかが重要。その際、拠点施設においては資本やタイミングの関係もあるが、緑の基本インフラは、外資が他の都市と比較する際に基準となる。(稲田)
- ・医療の話は国際レベルの戦略として、バキュームになると思う。そこにカンファタブルが加わり、さらに沖縄の環境や文化までもが、ホスピタリティの沖縄として実現されれば、十分競争力となりえる。(稲田)
- ・世界水準のリゾート地を目指すのであれば、街路樹の景観的な連続性という観点も重要。たとえ

建築物がバラバラであっても街路樹が統一されていれば人間は心地良さを感じることができる。地区ごとの緑イメージが統一されていることが重要。(稲田)

- ・グラウンドグリーンは景観にとっても非常に重要で、芝が綺麗だとまわりが少々汚くても良くみえる。極端に言ってしまえば、草刈りするだけでも良い。リゾートのランドスケープで大切なのは、景観的な統一とニートさ。美しいというよりも、すっきりしていて気持ちよさが大事。(稲田)

## 【公園・緑地に関すること】

### ●公園の位置づけについて

- ・2022年に迎える本土復帰50周年の記念事業として、国営公園事業を位置付けるべきである。海洋博も首里城もそれぞれ記念事業の一環として国営公園化が図られており、普天間飛行場が返還された跡地に国営公園を整備するというのは無理のないストーリーである。(松本)
- ・国際博覧会を誘致して、その跡地利用として国営公園を整備するという流れができればよりスムーズである。国際博には一般博、特別博、登録博などの種類があり、2022年に何が開催できるかを調べて取り組んではどうか。国営公園化は急ぐ話しではないが、国際博なら今から検討することの必要性に説得力がある。(松本)
- ・大規模公園の全体を国営で考え、県営公園との分担はその後の調整で検討するとよい(松本)
- ・国家的記念事業という位置づけで、海洋博、首里城に次ぐ国営化を検討すべき。ロ号の歴史公園型は、地方の歴史では難しい。ハ号は国の制度として無いため、あまり検討しても意味がない。この中では、まずは内閣府と記念事業の開催に関する調整を図り、国交省との協議はその後でよい。(松本)
- ・国営公園ということで考えると、ロ号は資源性に関係しない。防災機能の導入や歴史文化の活用などは当然あってもよいが、これをやると国営ということではない。それよりも、「平和」をテーマにするならば「平和を支える技術」をどうみせるかなどを検討していくべきである。(松本)
- ・公園の2~3割だけ手を入れ、そのほかは園路程度の整備に留めるような、都市公園と国立公園の中間的な性格の公園(リージョナルパーク)の導入が望ましい(蓑茂)

### ●動植物園・水族館等の整備

- ・シンガポールを上回るスケール感を持つ動植物園の整備はいいのではないか。海洋博の熱帯ドリームセンターは老朽化しており、これを廃止すれば海洋博の海、首里城の王朝文化に対して普天間は緑という棲み分けができる。マスで見せることが出来れば、沖縄の緑でも十分国際的に勝負できる。(松本)
- ・水族館や首里城正殿、温室などの観光基幹施設は県で管理すべきである。県で管理することで、指定管理者への発注の際に地元業者を優遇出来、本土資本から守ることが出来る。(松本)
- ・リージョナルパークシステムに国で取り組むなら、島嶼研究を行う自然史博物館が欲しい。そして地元の人材や大学で研究に取り組むとよい。(蓑茂)

### ●イベント等の運営について

- ・基地内の樹木を移植するイベントを行うことで、地域の内外を結ぶムーブメントのひとつとなる。  
(蓑茂)
- ・幅広い知見を集めるために国際シンポジウムを開催するのも良い。20～30人のスピーカーを集めて分科会方式で実施し、議論の成果を普天間跡地の計画に反映できるものでないといけない。(蓑茂)
- ・シンガポールでは、鉄道敷き跡地の利用計画を作成するにあたり、国際コンペを実施しており、日本にも説明にきた。これを行うには、相当の情報を準備してアイデアコンペにする必要がある。また、審査体制をしっかりとつくるのが重要で、これが人を育てることにもつながる。(蓑茂)

### ●公園・緑地、景観計画について

- ・緑地ネットワークの形成として、水では周辺河川も含め、緑では斜面緑地の貴重な空間を重視すべき(石川)
- ・世界的なリゾートは景観が統一され心地よさがある。そのためにも景観的連続性、バランスを考えることが重要になる。シンガポールも時間をかけて緑を創出してきたので、時間はかかるだろうが沖縄らしさを魅せられれば中国文化圏から人が集まってくるだろう。(稲田)
- ・普天間跡地周辺では、70年間内と外が隔てられてきた。それをつなぐ緑の役割を明確に打ち出す必要がある。(蓑茂)
- ・これまでの公園等の整備は、「行政が担う公共」という役割分担のもとに進められてきたが、人口減社会の中で税収も見込めず、持続可能なまちづくりのためには、自ずと「市民が担う公共」へのシフトが求められる。(蓑茂)
- ・普天間跡地のまちづくりは、地域の与条件の変化を踏まえて、持続可能かどうかを見据えながら、再デザインを行っていく作業が必要になる。現在得られている知見からは、ネットワーク型の緑地になるということは概ね同意できる。(蓑茂)

### 【防災に関すること】

#### ●防災計画について

- ・空の機能について、ヘリは医療等の観点から平常時のメリットがあるものの、スピードや輸送量の点では飛行機に劣る。そのため両者の組み合わせによる計画が望ましい。海の機能については、普天間飛行場までのアクセス路が最重要課題である(室崎)
- ・防災計画について、地勢からくる災害の特性に特化するのも良い。(室崎氏の私論で) 全国の防災研究の拠点は、東北、東京、兵庫、沖縄と捉えており、普天間を台風防災研究の中核とすることも考えられる。(室崎)
- ・防災拠点においては非常時に対応可能な自立型のエネルギーシステムが必須(室崎)

#### ●防災の視点から見る公園について

- ・日常は運動施設や公園などとして利用され、災害時に防災機能を有する公園の検討が必要(室崎)

- ・ ネットワーク型の公園緑地の配置は、防災の観点からも良いと考える（室崎）
- ・ 国営公園化に向けては国家的な見地が必要。全国、東アジア圏への支援拠点としての発想もある。  
 実際、東日本大震災では沖縄駐在の米軍の動きが際立っていた。国際救援の際には、税関等考慮すべき事項がある。（室崎）
- ・ 全県的な地域防災計画の中での広域防災拠点となるべき（広域防災拠点に避難者は受け入れない）  
（橘）
- ・ 防災設備や機材は日常的にも利用されることが大事（橘）